

私が自分の家の家系について関心を持ったのは、二年前前の敬愛する祖父の死去を契機にしてでした。調べ始めた時は、祖父が佐伯権之助惟定の直系子孫であることは全く知らなかったし、ましてや九州の佐伯市と関係があるなど夢想だにしませんでした。しかし、その後資料を調べれば調べる程、色々な事柄が明かになり、また、自らの祖先でもある佐伯氏への興味は増してきました。

考察・佐伯権之助家



佐 伯 朗

(会員・東京都練馬区石神井台)

データベースに打ち込んで年月順にまとめました。こうして「佐伯氏関係人物辞典」・「藤堂藩佐伯家関係文書年表」とも言うべき代物が完成を見ることになりました。次は資料の吟味です。集めた本の著者の方々に感想疑問点等を含めた手紙を出し返事を待ちました。この中に「巴の鏡」の作者であられる御手洗一而氏もおられ私の失礼な質問にもかかわらず有り難いことに直ぐに返事を下されました。その返事の手紙中で佐伯史談一五五号の「津藩佐伯権之助風聞」を示唆して下さったので国会図書館で閲覧しました。

前々から諸書に於いて引用

会図書館・大学の図書館に通い詰めて本の複写に努めました。そして、それらに記載されている佐伯氏家中の者の名前を片っ端からデータベースに打ち込んで整理し、また、藤堂藩関係の文書については、これもまた全てデー

されている「佐伯史談」の存在は知っていましたが、この時初めて佐伯史談会が佐伯地方に限らず広く佐伯氏関係について研究されていることを知り、入会させていた

だく決心をした次第であります。

さて、前述したように、主題の件について私なりにまとめましたので、それをここで述べさせていただけたいと思います。

一
まず、玉置氏のご指摘にある佐伯二十九、三十代の問題である。

三十代とされる惟親は藤堂式部家四代・信副の三男で佐伯貴和馬惟親と称していた。また、藤堂勘解由家の系図には、藤堂勘解由十二代氏任の妹・佐伯貴和馬の室と記されている。ところが、佐伯三十二代・惟章の娘は、藤堂勘解由十代・氏従の室と記されている。これはどう考えてもおかしく、また、惟親のみが津城丸ノ内外に住しており、墓石が四天王寺にないことから、惟親は権之助ではないのでは？という疑問が提起される。

惟晴―惟親―惟徳―惟章―女(惟明)―
室(藤堂勘解由十代・氏従の)

→
室は藤堂勘解由十二代氏任の妹

藤堂縁の人々の中で惟晴・惟親を権之助としているのは、藤堂式部の後裔である。故・林泉氏著『藤堂姓諸家等家譜集』の「佐伯権之助家々譜」によるものと思われるが奇妙なことに同氏の前著作である『藤堂高虎公と藤堂式部家』には次のように記載されている。

(藤堂式部四代、信副)三男善之助、津佐伯内蔵之助惟晴が養子となり、佐伯貴和馬惟親(家祿九百石)と号す。

貴和馬惟親、寛保二年、東武に供奉し、同年十月、病に罹り終に同月三十日、江府に卒す。三十二才。諡号・不生院一心万法居士。嗣子なし。病中遺言に因り、詔して緒方勝弥を以て養子と為し、遺領五百石を賜う

これを図に示すと、

惟信―惟定―□―惟徳
内蔵之助・惟晴―惟親―緒方勝弥

二作目に移行するにあたって、佐伯内蔵之助と佐伯権之助を混同した誤りかと思ひ、林氏の方に問い合わせて見たが、お亡くなりになった由聞かされ、これについて

は判明しなかつた。しかし、その後津の林氏宅を訪ね、奥様に色々お話を伺きし、また、原稿を拝見させて頂くと同書記載の「佐伯権之助家々譜」と「佐伯権之助由緒書」はそういつた古文書が存在する訳ではなく、林氏が他の系図や『庁事類編』、その他を照らし合わせて作り上げたものだった。つまり、誤謬も当然ありうる訳である。

一作目の記述は、藤堂式部家に伝わっていた家伝書を基にしたもので、こちらの方が信用度が高いと思われる。おそらく二作目に移行する時に、権之助と内蔵之助を混同したのであろう。

緒方勝弥以降の誰かが佐伯貴和馬という名を使用したとすれば、勘解由十二代の妹が室になっているのも領けないことではない。ただし、『藤堂姓家譜集』には、佐伯内蔵之助は「先代惟信に御加増の内、二百石を賜る」とあり、惟親と禄数が合致しないので、ここにも疑問が存在する（惟晴・惟親のどちらかが自分の禄を最初から六百石持っているか、一作目の禄数を権之助と間違えているかすれば合致するが・）。

『庁事類編』に幕末になると「佐伯環カマキ」（慶応三年に

鉄砲頭、同四年に護国中隊令士。弟に正雄あり）という人物が多く顔を出す。これが惟親 緒方勝弥の系統だとすれば禄数も五百石で丁度合う。

そうすると、佐伯二十九代を惟英、三十代を惟徳としたいところだが、ここにもう一人、人物が存在する。養子・惟昌（藤堂勘解由系図にある六代氏寅の三男・長井金五郎）である。「長井金五郎・佐伯権之助養子、後要人・惟昌他」とあり、時代的に考えて惟貞 惟徳間であることは間違いない。随分考えたのだが、結局系図構成は出来なかつた。惟貞―惟徳間に一人入るとすると、諸系図・墓石の代数などは惟寿を数えていないことになるが、『延陵世鑑』、『曾根本朱書』に「惟重子惟寿早世」ともあるし、正直言つてさっぱり分からないのが現状である。さて、『津藩風聞』に「嫡子惟泰が天保九年に卒したので」とあるが、天保九年三月に死去したのは但見・惟熙である。これは『庁事類編』の月日と墓石の記述が一致するので間違いないと思われる。また、佐伯惟徳が「惟慶」と称したとあるが、墓石の記述は「靈嶽院殿快嚴惟慶居士」となっているので、「惟慶」でよいのではないだろうか。

加えて、実際には津藩において佐伯家庶子はもつと存在していたようである。寛文四年の記録に「大神朝臣惟直」と書かれているものもあり、藤堂家中で「大神朝臣」などと書くのは佐伯家人以外にないだろう。慶応三年の長州征伐にも、佐伯姓の侍士が複数参加している。

こういった系図調査は、寺の過去帳が最も頼りなのだが、佐伯権之助繁代の墓がある四天王寺に電話を掛けて「拝見させて頂けるか」と尋ねた処、無縁になっていることを理由に、にべもなく断られてしまった。津に赴いたときにもう一度頼んだが、過去帳どころか、反対に墓を整理してしまつてよいかと言われる有様で、仕方なく佐伯氏の墓を探がして掃除し、線香をあげ、写真とメモをとつて帰つた。四天王寺は区画整理を実施中で、無縁になつた墓はどんどん撤去してしまつているので、佐伯家の墓もお金を納めない限り近いうちに撤去されてしまふだろう。残念だが、東京にもう曾祖父以来の墓があるし仕方ないのかもしれない。

四天王寺にあつた佐伯氏関係人物の名は次のとおりである。

佐伯惟信・佐伯惟貞・佐伯惟英・佐伯惟徳・佐伯惟

章・佐伯惟明・佐伯惟熙・佐伯惟貞妻・佐伯惟章妻
佐伯惟明妻・同後妻・佐伯惟徳妻・同後妻・佐伯良久・(佐伯惟寿女・佐伯惟彦妻)・佐伯惟彦・佐伯環□□・佐伯惟為(一)内は同一人物。□は判読できなかつたもの)。

墓石がない人々。

佐伯惟定夫妻・佐伯惟重夫妻・佐伯惟晴・佐伯惟親
佐伯惟寿・佐伯惟一等。

二

次に佐伯姓を名乗る津藩の家々について。

正保元年

明治十五年

佐伯権之助 千石

佐伯権之助↓佐伯惟一

佐伯六左衛門 百三十石

佐伯久左衛門↓佐伯惟毅

佐伯久左衛門 百石

佐伯正右衛門↓佐伯正?
佐伯彦之進↓佐伯彦太郎?

文政九年

佐伯 環↓?

佐伯権之助 六百石

佐伯久左衛門 百三十石

また、久居藩に

佐伯正右衛門 百八十石 佐伯彦四郎（新心流居合術師

範）七十石 あり

佐伯 環 五百石

佐伯彦之進 百九十石

佐伯正左衛門 九十石

惟定に付き従つて津に來た家臣達の内、長田三郎兵衛の家が累進し、幕末まで藤堂家中に残つたのは玉置氏の補記に詳しい所だが、この三郎兵衛惟氏（初代）の朝鮮の役に於ける様子が『船威考』（中村勝利氏の著書中）に載っている、それを参考までに転記する。

・佐伯権之助惟定は与力・足軽八十人を指揮して敵の艦船二隻を乗取る。此日味方の各軍団敵の艦船に攻かかるに、高大にて城の如し。石火矢、大筒火矢を發し、火器を投げ味方死傷する者多く、よつて各軍団猶予する所に、佐伯の与力・杉谷忠兵衛惟之、小舟に乗つて進み寄り長槍を以つて敵の大船に曳掛ける。此勢いに乘じて長田三郎兵衛惟氏一番に乗り移り勇戦す。敵兵僻易して靡き開く。三郎兵衛早く進み隊將を切つて其首を取る。残卒恐れて船

底に隠れおののく。此時各軍団より此船に乗り各旗馬印を立てる。三郎兵衛大声を出して「此の船は藤堂家の得たる所なり」とて其旗旗をことごとく海上へ投げ落とす。友松猪兵衛・高畑理兵衛・佐伯小右衛門等、其船に乗り移り公の旗を立てる。・

『大友興廢記』の著者・杉谷宗重は、これに出てくる杉谷忠兵衛惟之の一族ではないかと思われる。また、直臣となつた佐伯十二家士の中には杉谷十左兵衛なる人物がいるが、この十左衛門は寛文十三年に追放に処せられ絶家となつた（宗国史）。

佐伯小右衛門は日向高城合戦に於いて戦死した佐伯掃部助（かもんのすけ）鑑述の息子・佐伯小右衛門統虎（むねとら）惟定の従兄弟一ではないかと思われる。また、高畑理兵衛と、いま一人の高畑七郎右衛門（豊後三河内城攻撃に参加した高畑勘左衛門の息子）の二高畑家は幕末まで続いた。この他、衛藤・那須の各家も幕末の分限帳に見当たらない。

さらに、佐伯久左衛門家とは惟定の叔父・佐伯惟澄の系統ではないかと推測するが、定かではない。前述の如くこの佐伯久左衛門家の明治期の当主は佐伯惟毅とい

明治二十五年から明治三十八年にかけて津市の津市会議員を勤めていた。津市市役所を訪れて尋ねた処、現副議長の方があちこち電話を掛けて調べて下さったが、結局詳しいことは分からなかった。ただ郷土史家の樋田清砂氏に少しお話を伺ったところによれば、佐伯惟毅という人は明治初期に行政に於いてかなり活躍した人だそうであり、ひよっとしたら子孫の方が見つかるかも知れない。また、参考までに『津市史』の記述を転記しておく。

佐伯家

佐伯権佐は大神姓豊後大守数百年相続凡そ天下の名家遍く知る所也。没落の後大和納言殿（羽柴秀長のこと）に任へ後ち後家にくる。家宝とする所神息太刀其外名器数種あり。其の中に源義経公太刀、旗などもありたり。是れ同家が義経に対する無二の味方故物せらしにていづれも一子相伝し来り他見を禁ず。佐伯町は本与力の士の住居なり。此の西野に一の林即ち佐伯の社なり。祭りは霜月なり。七日の潔濟其の内は登城も不参物頭勤役の時も一の出所断おし出したる事也。佐伯、長田、高畑の類皆与力なり。衛藤伝佐衛門も与力なり。これは新家にて頼朝

公富士巻狩の前抱えたるといふ。大和納言より拝領金の鬨斗付きの刀あり。若し他家に所持せは重器なるべきに権佐家にては軽く取扱ふ也。今玄関にかかる熊毛太刀、錢、長刀の角の五輪紋ある大鐔のかりたるこの二品七十万石の時の持道具なりといひ伝ふ。大阪陣の時下々まで番具足着せたるは佐伯権之助ばかり。其の下々は皆素肌なりといふ。治世の了管は替りある事毎々此くの如し。今にはじまる事ならねは先づ下々へも合点すべし（洞津遺文）。

佐伯町は今はなく「さへき町公園」があるのみ。

三

さて、玉置佐右衛門十一代であられる玉置孝光氏『津藩風聞』記述の昭和初期の当主・佐伯惟幸は自分の曾祖父に当たり、明治以後の佐伯直系本家の経緯を述べる時、こうなる。亡き祖父は初代大神惟基から数えると三十七代、叔父は三十八代と言うことになるだろうか。津から東京へ移って来たのは惟幸の時で、父の惟一が早くに亡くなった為、幼い妹二人と共に母方の東京の縁者に引き取られた由である。東京に移住してからは、東

京の藤堂伯爵邸で家令として勤務していた。また、祖父の惟元も一時、同職にあったそうで、叔父も藤堂邸に何回行った事があるようだ。



昭和初期の暮らしはかなり困窮していた様子で、祖父も生前、子供時代のことを話してくれた時に、「武士の家といってもひどい貧乏でね。何とかして楽になろうと思っただよ」と言っていたから苦労したのだろう。

東京都内を何度か転居したそうで、直系の本人達が佐伯権之助の名前さえ知らないのだから、他人が探そうとしても見つからないのは道理と言える。

なお、叔父には男子がないので、初代以来の佐伯惟□という名はここに途絶えることになった。

四

次に、『津藩一風聞』で述べられている諸事と佐伯家所蔵の物品について述べる。

まず「佐伯の宮」についてだが、これは明治四十年頃津市宮之前の大手神社に合祀され、跡地は刑務所内となった。

『津市史』も佐伯の宮について記述しており、

境内は八十六坪で老樹が生い茂り、みだりに樹々を折り取ると神罰があると言い伝えて恐れられた。

佐伯権佐がここに来往してきた時に、豊後直入郡の祖神姥嶽明神を移し祭ったので、俗伝に佐伯の祖先は蛇であるという怪異を伝えた。ある時藩主が丸ノ内の佐伯の宅に臨んで、祖先代々の秘箱を開こうとしたら、にわかに一天がかき曇り恐ろしい空模様となってきたので、さすがの藩主も驚いて中止したということがある。佐伯家は桑名藩にもあるが、同じようにその祖神である姥嶽明神の神霊について、これと良く似た伝説がある・・・。

とある。

そこで「佐伯の宮」合祀する大市神社を訪ねた処、雨のなか親切にも神主の方が資料をコピーしてきてくれたそれが次の物で、長いので少々略す。

大宇岩田字西裏六百四番地無格社佐伯社ノ鎮座ナリキ由緒ハ勸請年月不詳豊後国直入郡祖母嶽二鎮座有之祖母嶽社ノ分靈ヲ祭ル所ノ者ナリ。三重県土族佐伯惟一ハ右明神の末葉ト云。・（明治十二年調、神社明細帳）。

『津藩く風聞』に祠のことが少し出ているが、神主方に尋ねたところ、祠も大市神社にあったそうで、先代の神主の時に火事で焼失したとのことだった。

そして、先祖伝来の系図及び文書。これは、残念ながら東京大震災の折りに全て焼失してしまっていて何も残っていない。ただ所蔵の品の方は、太刀二本、脇差し一本、その他が祖父の亡弟の家にあり、焼け焦げ鞘が無く錆び付いているそうだが、ともかく残っている。見せて貰おうとおもったが、親戚上の問題もあり、なかなかうまくいかない。叔父の話によると、それらの品は曾祖父が焼け跡から拾い集めた物だそうで、その内の『津市史』に記載されている銭は見たことがあるそうだ。

佐伯家所蔵の刀剣の内、「神息」・「小屏風」・「巴作り」はそれぞれ奉納された後、なぜか転売されたりして残っていないが、「手鉾太刀」（抜かずの太刀）は、他家に渡った記述がないので、ひよっとしたら二本の内どちらかが、そうであるかもしれない。

最近では大学の勉強をそっちのけで佐伯氏研究に没頭している為、父などは苦笑し、祖母にはそんな大きい家柄ではないと笑われる有様だが、少しでも真実に近い家系図・資料編纂を目標に努力したいと思っている。なお自作の系図を同封したので、何かお気付きの点があったらお知らせ願いたい。

最後になりましたが、佐伯一族の一人として、佐伯氏研究等に力を注いで来られた佐伯史談会に厚くお礼を申し上げます。

平成三年八月九日